

教材活用シリーズ 第128回

☆日図協加盟出版社の発行している教材について、実際の授業における活用例、より効果が得られるポイント（場面・方法）などを紹介します。

(株)五ツ木書房
『英語リピート&マスター』
中学1～3年



やました ゆうこ
山下 裕子

(株)五ツ木書房
第一編集部次長・英語担当

くり返し学習で基礎が確実に身につく！

2. 教材の特長

今回ご紹介するドリル教材『英語リピート&マスター』のコンセプトは「忘れるスキを与えません!!」。徹底的なくり返し学習によって、中学校で学習する基本単語・基本文を確実に身につけることを目指しました。中学1～3年、各64回、計128ページの編成です。

(1) 全64回の豊富な練習量

本教材では、1回が教科書の各セクションに対応しており、各学年64回から成ります。1回あたりの問題数は表面・裏面とも各10小問で、5分間で実施できることから、授業のウォーミングアップや朝学習の時間で使いやすいものになっています。

(2) 徹底したくり返し学習

表面の半分（5小問）は〈前回範囲〉からの出題、裏面は〈前回十前々回範囲〉の単語練習となっています。新しい学習内容と復習内容の組み合わせで、スパイラルに学習を進めることで、単語・基本文の定着を図ります。

例えば、No. 17の表面の半分となる5小問は、No. 16の範囲からの出題で、前回範囲の問題には、それとわかるように「リピートマーク」がついています。No. 17の裏面の問題は、すべてNo. 15とNo. 16の範囲の単語で構成しています。

1年のはじめはアルファベットの練習を3回設け、小学校で学習した内容を振り返ること

1. はじめに

2021年度から中学校で実施される新しい学習指導要領では、育成すべき資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理し、英語の領域を現行の4領域から5領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「やり取り」「話すこと」「発表」「書くこと」）で示しています。これらの領域別の目標を実現することを通して、三つの資質・能力を育むことが全体的な目標として設定されています。

英語では、「実際のコミュニケーション」を意識した活動がよりいっそう求められることとなります。具体的な状況の下でのコミュニケーションの場面に合わせて、さまざまな情報やお互いの考えを理解し、表現し、伝え合うこと——そのためには、どのような言葉を使って自分の考えを表すのかを学び、表現の幅を広げていく必要があります。このため、取り扱われる語彙数も大幅に増加し、小学校で600～700語程度、中学校では1600～1800語程度とすることが盛り込まれ、現行の1200語の約2倍になっています。

ができるほか、2・3年では前学年の復習回を設け、新しい学年へスムーズに移行できるようになっていきます。さらに、Unit毎のまとめ回、学年のまとめ回（3回）で、徹底した復習学習を図ります。

▼問題（表面）

17 Unit 2-②

① 英語は日本語に、日本語は英語にしないで。

(1) program (2) world
番組、プログラム 世界

(3) Earth (4) coach
地球 コーチ

(5) knowの過去分詞 (6) I haveの短縮形
known I've

② 日本文に合う英文になるように、____に適する1語を書きなさい。

(1) ケイトは東京に1週間滞在しています。
Kate _____ in Tokyo for a week.

(2) あなたはテニス部の一員ですね。
You're on the tennis team, _____?

③ 日本文に合う英文になるように、()内の語(句)を並べかえなさい。

(1) あなたは3年間ずっとこの自転車を使っているのですか。
(this bike / you / used / for / have) three years?
Have you used this bike for _____ three years?
現在完了形の疑問文では have(has)が主語の前に出る。

(2) わたしは2000年に日本に来て以来、ずっとここに住んでいます。
I (since / lived / in 2000 / I / came to / have / Japan / here).
I _____ since I came to Japan in 2000.
sinceのあとに「わたしは2000年に日本に来た」という文が続く。

(3) 基礎単語・基本文の完全マスター

1 回毎の出題範囲を教科書のセクション毎に細かく区切ることで、基礎となる重要単語・表現と基本文を網羅しています。教科書に出てきた新出語のうち、必修語・重要表現についてはすべて取り上げ、単語のつづりに触れることができます。

表面は、「英語から日本語、日本語から英語の単語の書きとり問題」で基本となる必修語・重要語句を確認、「空欄補充問題」で基本文や重要表現を練習、「並べかえや書きかえ問題」で基本文をマスター、という順番で問題を配し、少しずつ段階を踏んで単語・基本文を身につけていきます。

裏面は表面が終わったあとの自習用、または家庭学習用として使用することができます。も

ちろん、時間に余裕のある生徒は表面に続けて実施することも可能です。問題数は1回につき10小問で、必修語・重要表現の意味を書いてから、3回くり返して単語を書く練習をすることで、つづりの定着を図っています。その他にも、簡単なパズルやクイズなど、さまざまな問題形式で復習に取り組みることができます。

◀▼問題（裏面）

◆単語・語彙の復習

1) Earth _____
2) match _____
3) wrestling _____
4) many kinds of _____
5) since _____
6) kind _____
7) prefecture _____
8) some of _____
9) national _____
10) I've _____

◆アルファベット(大文字と小文字の組み合わせ)の復習

A	H	R	h	r	b	o	C	O	A
O	N	c	y	u	a	f	m	F	J
D	p	z	N	M	U	I	v	a	L
F	I	i	B	N	C	H	x	i	C
K	g	t	J	D	M	R	e	q	V
H	N	E	C	Z	G	S	w	n	J
Y	Q	P	N	W	w	b	j	Z	B
A	N	B	G	c	d	f	E	L	G
S	C	U	D	s	g	O	A	P	I
G	I	X	T	M	N	F	N	C	F
Q	B	R	N	a	d	V	H	K	P
N	L	W	E	k	h	D	N	T	A

(4) 生徒の理解を助ける解答・解説

解答・解説は、生徒が採点・復習しやすいように、問題と同じ形式で作成しています。問題の行間に解説を入れてあり、解答のポイントが確認できます。また、裏面の問題で取り上げた単語の意味も掲載していますので、生徒が自分で学習する際の手助けとなります。

(5) 成果を確認できる学習記録表

生徒が毎回の学習結果を記録するための「学習記録表」では、テストを行った「実施日」と

表面の「得点」、裏面の「自己評価」はA(よくできた)・B(まあまあ)・C(もう一度復習)の3段階で記入します。日々の学習の成果を確認することができ、生徒が自分のつまづいた回をひと目で把握できるようになっています。

▼解答・解説

17 Unit 2-② 解答

① 英語は日本語に、日本語は英語にしないで。

(1) program (2) world
番組、プログラム 世界

(3) Earth (4) coach
地球 コーチ

(5) knowの過去分詞 (6) I haveの短縮形
known I've

② 日本文に合う英文になるように、____に適する1語を書きなさい。

(1) ケイトは東京に1週間滞在しています。
Kate has stayed in Tokyo for a week.
主語が三人称単数のとき、現在完了形の have は has にかわる。

(2) あなたはテニス部の一員ですね。
You're on the tennis team, aren't you?
同意を求める表現。肯定文なので、否定の疑問形を文の最後に書く。

③ 日本文に合う英文になるように、()内の語(句)を並べかえなさい。

(1) あなたは3年間ずっとこの自転車を使っているのですか。
(this bike / you / used / for / have) three years?
Have you used this bike for _____ three years?
現在完了形の疑問文では have(has)が主語の前に出る。

(2) わたしは2000年に日本に来て以来、ずっとここに住んでいます。
I (since / lived / in 2000 / I / came to / have / Japan / here).
I have lived here since I came to Japan in 2000.
sinceのあとに「わたしは2000年に日本に来た」という文が続く。

3. おわりに

英語のコミュニケーション能力を伸ばすためには「聞く」「読む」「話す」「書く」という四つの技能をバランスよく育成することが重要となりますが、これらの四つの技能を支える土台となるものが、英語の「語彙力」と「文法力」です。生徒が自分の言いたいことや表現したいことを表すための材料となるものが「語彙」であり、その材料の使い方を知る手段が「文法」である、とも言えるでしょう。

単語や文法の学習は、ともすれば生徒にとって単調で退屈なものになりがちですが、先生方のご指導の一助となる良質の教材を作成できるよう、今後とも工夫を重ねて参ります。